

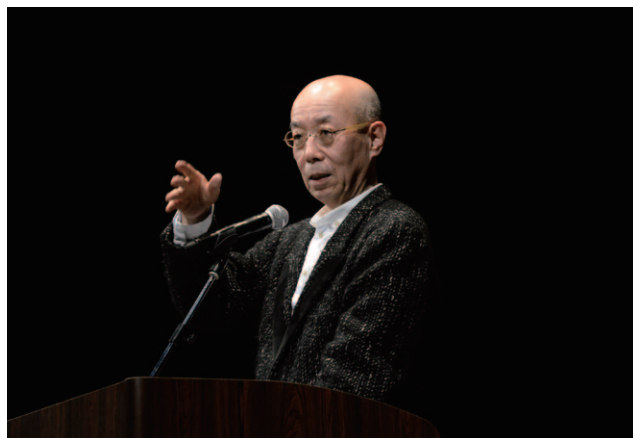
## 「心豊かに生きるための心構え」

哲学者・前大阪大学総長・京都市立芸術大学学長・せんだいメディアテーク館長

鷺田 清一



### 「心豊か」とはどういうことなのか？



こんばんは。先ほど京都から参りましたが、東京はあったかくてホッとしました。「美しい生き方を考える」シリーズの最終回にお招きいただきまして、どうもありがとうございます。

私、3年ほど前に大阪大学の総長職を辞したわけですが、総

長になりました当初、ちょっとなじめない習慣がありました。それは、入学式とか卒業式のときに、中世から続くイタリアの大学と同じマントを着て、帽子をかぶらなければいけないんです。あの出で立ちにはなじめなかったですね。

そして、その出で立ちで卒業生の皆さんにお話する時に、「うわー」と、腹の底からこみ上げるものもありました。それは何かといいますと、帽子には長い房がついていて、顔を揺さぶるたびに、その房の先がふっと顔に触れるんです。その時に、高校時代の自分を思い出したんです。私、高校時代は長髪で(笑)。あの頃、毎日、髪がふっと顔に触れていたことを突然思い出して、何十年ぶりかの感触を感じて、胸に強く込み上げるものがあったことを覚えています。いまではこういう髪なき髪型になってしまいましたが… (笑)。

「見目麗しくあるためには、どうしたらいいか」について、私にはもはやお話しする資格はありませんが、「心豊か」だったら話せるんじゃないかということで、今回もお招きいただいたのではないかと考えております(笑)。いまの話、冗談で言っているのではなく

て、実はこれからお話しすることに深く関わっています。

「豊かな暮らし」と考えると、心温まる家庭生活であるとか、美しい自然に囲まれているとか、余裕があるとか、さまざまな情景が思い浮かびます。けれど、「心豊か」と考えた時は、意外と難しいです。「心の豊かさ」というものは、「暮らしの豊かさ」ほどには単純ではないような気がします。気持ちの中身が濃いというか、命が大きく呼吸しているというか、何かそういうイメージが、私の中には「心の豊かさ」としてあります。

「気持ちの中身が濃い」とは、必ずしもいいことばかりではありません。幸福感に満たされているとか、希望があるとか、心地よいとか、そういうものだけではなく、深く傷ついたことがあるとか、捨てられない思い出があるとか。痛いもの、せつないものも含めて、私は「心の豊かさ」というのではないかと思うんですね。

### 激痛は、人をいまここに閉じ込める

20年くらい前、日本のホスピス医療の先駆者でもあります柏木哲夫先生とお話しする機会がありました。末期がんで苦しんでいらっしゃる方が激痛に襲われていますと、ホスピスでは、治療ではなく緩和ケアというものをされるわけです。「どうして緩和ケアが必要なんだろう」という話題になった時、私が、私にとってはすごくリアルなことです、突拍子もないことを申し上げました。

「激痛っていうのは、人を、いまここに閉じ込めてしまう。人の気持ちをここから離してくれない。だから、激痛というものを遠ざける必要があるんだ」と。たとえば「疼き」でしたら、昔に大けがをしたり病んだりして完全に治癒できていなくて、ちょっと気圧が下がったり、ちょっと湿度が上がっただけで、古傷が疼くということがあります。心の傷も、「トラウマ」と言ったりします。体の傷も心の傷も、普通の傷の場合は過去を引きずっているところがありますが、激痛に襲われた時というのは、昔のことなんか思い出している心の余裕がないんです。明日のことも、とても考えられません。

このように、人の意識が、現在にギュッと閉じ込められてしまうんですね。このことによって、人は希望というものと無縁になるんです。「将来、こんな暮らしをしたい」「将来、こんな人と出会いたい」「こんなものを食べたい」といった希望は、苦痛の中にある時にはちっとも考えられないし、昔の楽しかった思い出に浸ろうなんていうことも、絶対にできません。「今の苦痛から逃れたい」。それしかないわけですね。これは、希望や思い出だけではなく、不安すらも覚えぬ。将来のことなんて考えられないから、不安もなく、過去のことについての後悔というものすら、もはや意識にのぼってこない。

このように、激痛は、人を現在に閉じ込めてしまうことで、希望と不安、よき思い出と悔

恨という極めて人間的な思いを不可能にしてしまうんです。「激痛が、私をここに閉じ込める」ことは、「世界をいまここにしか、感じられなくなる」ことなんですね。他人を思いやるとか、他人に思いを寄せるとか、他人の気持ちになるといった、自分をよそに移し替えるという余裕がまったくなくなってしまいます。いまここでしか、世界を感じられなくなるということなんですね。つまり、希望も不安も思い出も悔恨も不可能になり、他者への思いやりも共感も持つ余裕がなくなる。人であるために一番大事なもの、あるいは本質的なものをいくつか不可能にしてしまうのが、激痛というものなんですね。

「だからこそ、激痛をやわらげる緩和ケアが必要になるのではないですか?」ということを申し上げました。柏木先生は、「そんなふうに考えたことはなかったけれど、なるほど」と、深く頷いてくださいました。

私は、「心豊か」ということは、中身が濃いことではないかと思っています。心地よいものもよくないものも含めて、いまここから、未来へ、過去へ、あるいは他の人たちへと、広い心をたなびかせる中身の濃さです。このことが、人としての心の豊かさにつながるのではないだろうかと思うんです。

### 古い都市にある3つの装置

古い都市に行くと、心の豊かさを育んでくれる装置がたくさんあります。私は、ニュータウンにはなくて古い街にある装置を、大まかに3つ考えます。1つは大木です。土地を造成してつくるニュータウンにあるのは、基本的には新しく植樹した木なので、大木はありません。もう1つは寺社などの宗教施設ですね。ニュータウンは、最近はやっと変わってきましたけれど、以前は特定の宗教施設を許してはいけないということで、お寺とか神社とか教会とかは建てにくかったですし、葬儀場はいつも無宗派が建っています。そして、3つ目が場末だと思います。ニュータウンに、わざわざ危ない場所、アンダーグラウンドにつながるような場所をつくるわけにはいきません。

では、古い都市にある3つの装置はどういう働きをしているのでしょうか。まず樹齢何百年もの大木です。私たちが時間、あるいは時代というものを考える場合、過去にさかのぼっても、せいぜいおじいちゃんの時代ぐらいしか、リアルには感じられません。あまり遠い先までは考えられないですけど、大木というものに囲まれて過ごしていると、おじいちゃんの代までの時間感覚よりもうーんとスケールの大きな時間、長いタイムスケールの中で、いまを感じることが出来ます。つまり、現代の向こう側にあるものから感じる事が促されるのです。

宗教施設はどうでしょうか。宗教施設では、この世をあちら側から見ます。それは神の

国かもしれないし、あの世かもしれない。要するに、私たちがこの世の価値観で、「幸福とはどういうことか」「喜びとは何か」「正しいとはどういうことか」と、当たり前だと思っていることを、彼岸のほうから、あるいは天のほうから見ると、多くの場合、違う価値観になります。違う価値観で、私たちのこの世界を照らしてくれる。これもやっぱり、向こう側からの視線なんですね。

最後に、場末。これは、世界を裏側から、闇のほうから照らしてくれる装置です。いつも、脅えとともに見えない、闇の存在を感じさせてくれる装置。それは、社会の闇かもしれないし、一人ひとりの心の奥底にある闇かもしれません。そういうものから、いまの意識している自分を見ろという、そういう視線を育んでくれるんですね。

古い都市にある大木、寺社、場末という装置は、この世界を完結したものとしなくて、この世界からその外へ出ていく穴のようなものです。穴から世界の外に出て、向こう側から自分たちがいる場所を見ることが出来る。私は、いまの世界を分厚く立体的に見せてくれる仕組みとして3つの装置があり、これらはとても大事なものではないだろうかと思います。



### 「華やぎ」と「安らぎ」から豊かさを考える

清濁を織り交ぜて、楽しいことから苦しいことまで含めて、中身が濃いということ。「心の豊かさ」というふうに考えていった時に、その概念について、「華やぎ」と「安らぎ」という2つの言葉を思いつきました。

京都を語るときのキーワードは、ずっと「伝統」と「革新」の両輪でした。一方に分厚い伝統があり、他方には前衛芸術とか前衛思想とか科学の最先端とか、共産党があるという。それが自慢でしたが、私が京都市基本構想の起草委員長になった時、「伝統」と「革新」という言葉を使わずにそれを書こうとしました。その時にみんなで考えたのが、「華やぎ」と「安らぎ」です。この2つの言葉から、「心豊かに生きる」ということを考えてみたいと思います。

「華やぎ」には、それぞれの存在がそれぞれに花を咲かせているという百花繚乱のイメージがあると思います。赤い花もあれば黄色い花もある、いろんな種類の花がいろんな色で咲き誇っているイメージの百花繚乱です。これを別の言葉にすると、「複数の可能性、あるいは多様な可能性に人が開かれている状態」と言ってもいいかと思います。

私が百花繚乱という言葉で思い出すのは、昔、私が高校に通っていた時の先生方です。全員がまったく違うお人柄でした。たとえば物理の先生は、教育に熱心なんですけれども、生徒を愛してとか、「生徒にこれを教えてやろう」ではないんですね。自分が前の晩にパーフェクトにつくった授業の資料をみんなに配る、その喜びなんです。ものすごくナルシスティックに、ニターッと笑って配られる。僕らの顔なんか、全然見てくれません。黒板に物理の数式を書く時も、僕らのほうはまったく見ずに、ニターッと書いていらっしやる。「自分のパーフェクトなスタイルを、こんなにナルシスティックに愛する人がいるのか」と、感心しました。

日本史の先生は、三つぞろいのスーツをきちんと着て、よどみなく日本史を語ってくださるんですが、生徒たちの目は、黒板にも先生の顔にも行かなくて、先生の腰に行っていました。「ピシッとしたスーツを着てるのに、なんでベルトのバックルだけがハゲハゲなんやろ？」と(笑)。すごいミスマッチなんですね。ほかの先生に聞きましたら、「あれ、三校のバックルなんや」。京都大学の前身の第三高等学校卒業というすごいエリートの微なんですよ。それを支えに生きていらっしやるんです。「ほお、こんなしょうもないことで、人の人生って支えられるのか」と思いましたね。

国語の先生は、文学が好きをやつとしかしゃべらなくて、エリート集団みたいなその子らを家に連れて帰って、深夜まで文学談義をする先生でした。一度だけついていき、部屋全部が本棚というのにびっくりしました。美術の先生は、忌野清志郎の「僕の好きな先生」とまったく一緒に、職員室が嫌い、タバコをパカパカとアトリエで吸っていらして。とか、例を挙げるとキリがない。要するに、みんな違うんです。

それぞれの先生が、自分のポリシー、大事にされていること、こだわっていらっしやるのが、全部違うんですね。「すごい！」と思えることもあれば、「あんなことを支えにしても、人って生きていけるのか」「あんなんでも、学校では通用するのか」とかですね。プラスマイナス関係なしに、いろんな価値っていうものがあって、それにはすごいものもあるけれど、しょうもないものもある。でも、そんなんでも人を支えることができるんだっていうことを、学べたんですね。

自分が育ってきた家族や地域にはいない大人たち。これまで知っていた、身近で接触していた大人とは全然違う価値を軸にして生きているいろんな大人の生き方を、その

背中を通して見られたということが、一番の財産になっていると思うんですね。苦境に陥って、前途がまったく見えなくなった時でも、「ああー、あんなんでも生きられたなあ」というね。

そういうふうにと考えると、「華やぎ」という意味での「心の豊かさ」は、生き方の一つの可能性に縮こまらないで、あるいはみんなと同じ生き方に閉じ込められないで、それぞれがいろいろな多様性にかかれている。一人ひとりが別の価値というものを体現している。そして、一人の人間の中でも、自分の中に対立する複数の価値軸を持っているということが、本当の豊かさということではないだろうかと思っています。

50代ぐらいになったらわかるんですが、50代になってもモテる人は、大体、元やんちゃ。つまり、中学時代から複数の人生、複数のネットワークを渡り歩いてきた人たちだと思うんです。やんちゃの人っていうのは、会社を定年になっても、お付き合いをする人がいっぱいいるんですね。だから、いつまでも楽しい。そういう、複数の可能性を捨てていないっていうことが、「華やぎ」の一つだと思います。

それと、そういう人は、自分が持っていない別の可能性にも関心を持ち続けているんですね。だから、自分の関心から離れる人の話に対して、聞き上手なんです。つまり、いろんな可能性にいつも開かれていて、少年のような気持ちを失っていない。人の話を「しょうもない」と決めつけずに、「ほおー、いろんな感じ方であるもんやなあ」と、いくらかでも人の話を聞いてあげることができる人。そういう人って、「カッコいいなあ。豊かやなあ」と思います。

豊かな人というのは、「未熟」を持ち続けている人。未熟って、世の中の荒波にもまれたら捨てざるを得ないものだけけれど、自分の中の未熟なものを守るためにこそ、きちっと成熟している人。つまり、「自分の中に未熟を隠し持った、成熟した人」というのが、分厚い感じ、中身が濃い感じというふうに思います。

モテる人は、同時に、子どもからあこがられる人でもあると思うんです。私が高校の先生を、苦手ではあっても嫌いではなかったのは、その人の中にいろんな矛盾、あるいはアンバランスなものがあったから。そういう、どこかいびつなもの、未熟なものを大事にするためにこそ、成熟している。そういう大人っていうものには、すごくあこがれました。

極めつけは、数学の先生です。ものすごい学究派で、職員室でも群れずに、フランス語の原書ばかり読んでいて。宿題をやっていなくても、絶対怒らないで、淡々と授業されているタイプの先生でした。その先生の車の後部座席には、いつも数学の原書が置いてあるんですが、ある時、その中にお経を見つけてしまったんです。「え？ あの合理主義者がなんでお経？」と。

何日かしてからほかの先生に「車にお経が入れてあったけど、何か信仰していらっしゃるんですか？」って聞いたら、「お前、何も知らなかったんか？ 実は何週間か前に息子を亡くされたんよ」と言われて、びっくりしました。クラス全員、誰もそのことに気づかなかった。もちろん先生は、休講もされなかったんですね。で、淡々とした授業をずっとされてきました。でも先生、あのお経がなかったら、身を保ち続けられなかったと思います。一人の大人の中で、破裂しそうなぐらいの葛藤があったということを知って。あれが、私にとっての、大人のイメージの原型なんです。すごいと思いました。あこがれました。そういう大人っていうものに。

学校で勉強する教科内容で、大きくなってから本当に役に立つものなんて、ほとんどないじゃないですか。でも、先生の背中が、僕らにもすごく大事なことを教えてくれた。そのためには、違う価値観が複数必要なんです。こっちではもう生きられなくなった、生を断念せざるを得なくなった時に、もうそれで終わりだと思わないで、「そういえば、こんな生き方もありだなあ」というふうに、いくつもの可能性に触れられるということ、身を開けるということが、豊かということ。「華やぎ」の意味ではないかなと思います。

次に、「安らぎ」です。この言葉はありふれていて、現代社会では「安心安全」に言い換えられますね。安心安全は大事ですが、「豊かさ」というものとは、なかなかつながりにくいです。

「代わりがいる」という言葉は、一般にはネガティブな意味に使いますよね。「お前の代わりなんて、いくらでもいる」と。こういう言い方で「代わり」という言葉を突きつけられることは、現代社会には多いです。スキルのトレーニングをする余裕が会社になくなっていたり、マニュアルを読んだらできるような単純作業に人々を移していくような、こういう時代の中で、ちょっと文句を言ったら、「あなたの代わりなんて、いくらでもいる」と言われること。実際に言われなくても、そういう情景がイメージしやすい時代になっています。私はこれを、「代替可能性」と呼んでいます。別の人で「代替」できることです。

でも私は、「代わり」という言葉には、これとは正反対のすごく大事な意味があると思います。たとえば「名代」という言葉があるで

しょう。自分が大事な交渉の席に行けない時に、「この人の言葉を私の言葉だと思ってくれ」と、名代を差し出すわけです。これは、100%信頼されている「代わり」なんですね。これを私は、「代替可能性」ではなく、「代理可能性」というふうに呼びたいと思います。「お前の代わりなんて、いくらでもいる」という言葉と対比して、「お前ができないのなら、誰かが代わりにやってくれるよ」という言い方です。

私は、「安らぎ」というのは、「いつでも誰かが代理をしてくれる」という安心感ではないだろうかと思うんです。自分が万が一病気になったり、大けがをしても、誰かが代わりにやってくれる。だからいまは、先のことを心配せずに、全力を出せるということです。

子育てだってそうです。いまの若いお母さんが苦しいのは、一人の人間が別の一人の人間の面倒をそっくり見るという、本来人間には絶対できないことをさせられているからなんです。むき出しの人間に一人で向き合った時、24時間なんて、絶対にもちません。1、2時間で十分です。昔は、お母さんと子どもの二人だけで孤立している状況というのはめったになくて、いつでもまわりからいろんな手が出てきました。「ちょっと代わってあげよう」とか、「お母ちゃん、こわいなあ。こっちにおいで」とか言って、隣のおばちゃんが引き取ってくれました。まわりに手がいっぱいあったんです。

お葬式をする時も、屋根の葺き替えをする時も、当たり前のように、まわりから手がびゅっと出てきた。「お前らだけでできないんだったら、いくらでも代わりはいるよ」と、どこかから手が出てくるという安心感がありました。私はこれを、「インターディペンデンス」と呼んでいます。直訳すると、インターナショナルの「インター」と、依存という意味の「ディペンデンス」。「お互い様」ということです。お互いに世話をし合う、頼り合うことを「インターディペンデンス」。独立という意味の「インディペンデンス」の代わりに言っています。「インディペンデンス」は、自分以外の人に「ディペンデント」でない、依存していないという意味です。

日本社会でも、自立ということがすごく言われるようになりました。私はその時に多くの人が、「自立とは、人の助けを借りないで生きられること」というイメージを持ったと思うんです。でもそんなこと、人間には絶対にあり得ません。「お金があれば、なんでもできる。サービスも買ったらいい」と言うかもしれませんが、つくってくれる人や運んでくれる人がいるから、お金で買えるわけです。だから、厳密に言えば、インディペンデンスなんか、人間にはあり得ないんです。

大事なことは、自分が何かできなくなった時に、いつでも、「インターディペンデンス(=お互い様)」と、手を差し伸べ合う、そういうネットワークをいつでも用意できているということ。これが「安らぎ」ということではないかと、私は思っています。



## 自前のセーフティーネット

私、昔から「ファッションの哲学」を勉強してきました。皆さんもご存知のように、日本のファッションを世界のトップレベルにしたのは、高田賢三さん、三宅一生さん、川久保礼さん、山本耀司さんといった、いま70代の人たちですね。あの世代に、世界をあっと思わせるようなクオリティの高い、冒険的なデザイナーがそろいました。しかし、その次の世代がなかなか出てきませんでした。

それが最近、30代に優秀なデザイナーがそろってきています。名前を挙げると、アンリアレイジの森永邦彦さんとか、リトゥンアフターワーズの山縣良和さん、matohuの堀畑裕之・関口真希子さんとか。彼らの行動様式は、40年近く前の世代とはまったく違います。有名になっても世界制覇というような野心を持たず、ショップを構えたのもついこの間だったり、広告を打ったこともなかったり。

「なぜ？」と思った時に、ふと気がついたのは、いまの30代ってどういう世代かということ、小学生の頃にバブルの崩壊を経験している世代なんです。ということは、彼らの世代は思春期以降、一度たりとも右肩上がりを皮膚感覚として持っていないんです。つまり、「明日は今日と同じか、ひょっとしたら悪くなるかもしれない。明後日はさらにひどくなるかもしれない」という感覚の中で生きてきた世代です。そして彼らが20代になった時には、首相が毎年代わるような頼りない政治が続き、不況が20年近くも続き、そしていまはさらに状況が悪くなっています。

そんな中、いま30代の彼らは、「インターディペンデンス」のネットワークを自前でやらなければいけないという感覚になっていると思います。自分たちで、仲間で、まさに手を出し合う関係です。こういうインターディペンデンスのネットワークのことを、私は

自前のセーフティーネットと呼んでいます。セーフティーネットは、これからは自分で作らなければいけないという。そういう感覚の世代が出てきているのではないだろうかと思ひ、このことは、ものすごく大事なことだと思っています。そして、本当の安らぎとは、そういうものだと思います。



これからの、否が応でも社会が縮小していく時代、国にセーフティーネットをつくる財力がなくなっていく時代には、自前でセーフティーネットをつくるしかありません。社会が縮小していく時に一番大事な人は、右肩上がりの時代に「行け！行け！」と前進していったリーダーではないんです。「これは無駄だからやめよう」という、かつてのリーダーが一番苦しい作業ができるリーダーです。そして、選択や撤退による犠牲が、偏った業界や個人に集中しないように、転職をうまく促すとか、利率をうまく確保するとか、いろいろなセーフティーネットを用意してあげられる、あえてカッコつきのリーダーが必要になってきます。そのイメージは、旗振り役ではなく、しんがりです。

登山のパーティで、一番屈強な人は、先頭には立たないで、しんがりにつくんです。なぜ最後尾にいるかということ、そのしんがりだけが全メンバーの様子を見ることができるからです。「誰か疲弊していないか」「息切れしていないか」を見る人です。で、リーダーの次に屈強な人が先頭に立ち、ペースを決めていくんです。一番体力のない人や経験のない人が2番手につき、先頭の人は、背中で「息があがっているなあ」「そろそろペース落としたほうがいいかなあ」「休憩したほうがいいかなあ」と判断します。

でも、この先頭の姿を含め、全体をケアできるのは、一番後ろの人です。その人は、誰かが落ちてきたら助けてあげられる力がないといけないうことですね。これからの、本当の意味での「華やき」と「安らぎ」がある暮らしというものを、我々がこれから工夫してつくっていく時に一番大事なものは、先頭を行くリーダーではなくて、むしろ、しんがりという務めを果たせる人なんです。しんがりマインドを持った人が少しずつ増えていく社会が、本当の意味での「心豊かに生きるための心構え」ではないかというふうに思います。どうもありがとうございました。



鷺田 清一  
(哲学者・前大阪大学総長・京都市立芸術大学学長・せんだいメディアテーク館長)

1949年生まれ。京都大学文学部哲学科卒業、同大学院文化研究科哲学専攻博士課程修了。関西大学教授、大阪大学教授、大阪大学大学院文学研究科長・文学部長、大阪大学理事・副学長、大阪大学総長、大谷大学教授を経て、2015年4月より京都市立芸術大学理事長・学長。専攻は哲学、倫理学。日本倫理学会会長、国立大学協会副会長、文部科学省文化審議会委員、日本芸術文化振興会評議員などを歴任。現在は、せんだいメディアテーク館長、アートミーツケア学会会長ほか、京都賞、サントリー学芸賞、大佛次郎賞、河合準雄学芸賞、和辻哲郎文化賞などの選考委員も務めている。

1989年サントリー学芸賞受賞「分散する理性」「モードの迷宮」、2000年第3回桑原武夫学芸賞受賞「聴く」ことの力」、2012年第63回読売文学賞評論・伝記賞受賞「ぐずぐず」の理由」他、著書多数。